

松下幸之助記念財団 研究助成

## 研究報告

(MS Word データ送信)

【氏名】岩澤克

【所属】(助成決定時) 上智大学

## 【研究題目】

キリシタン資料であるドミニコ会文献の本文整理を通じた再評価と、それを用いた日本語音韻史研究

## 【研究の目的】(400字程度)

16世紀後半から17世紀前半に掛けてキリスト教宣教師の手によって成立したキリシタン資料に関する研究の中で、注目されることのなかったドミニコ会によって刊行された文献群を対象として、その本文整理を行った上で、日本語音韻史研究を行う。本研究は、次の二点を主眼とする。

- 1)ドミニコ会により出版された文献及び自筆写本の全てを電子化(文字列入力)し、表記の計量的な対比による誤植・誤記の摘出、及びその合理的な本文整理規準を策定し、明瞭な規準に基づく本文整理を行なう。
- 2)前項の整理本文に基づき、既に電子化がほぼ完了しているイエズス会資料との計量的な対照を行ない、中世末期から近世初期の日本語音韻史研究の未解決の諸問題の新しい視点からの解決を目指し、併せて、ドミニコ会資料を日本語史資料として再評価する。

## 【研究の内容・方法】(800字程度)

本研究では、ドミニコ会の文献群を日本語史資料として扱うための本文整理と資料性の評価を行い、ドミニコ会の文献の日本語史資料としての性格を再検討する。そして、従来の日本語音韻史研究において未解決のまま残されてきた問題の解決を試みる。

## 1)ドミニコ会の文献を日本語史資料として扱うための基礎研究

ドミニコ会文献群を日本語史の資料として活用するためには、その前段階として、そこに現れる日本語の正当性を示さなくてはならない。現存の確認されている全てのドミニコ会刊行文献の現物を調査、もしくは、主要諸本の画像の入手を行い、それらを基に諸本整理を行った上で、各文献の電子テキストとしての全データ化を行う。そして、作成したドミニコ会文献のデータとコリヤード自筆本と対比することで、印刷過程において混入した誤植・誤記類の摘発を行う。また、ドミニコ会文献のデータとイエズス会資料の本文と比較対照し、音節表記のバリエーションを全て抽出し、文献間・各文献内の分布、音韻環境ごとの整理などを行う。それによって、ドミニコ会文献全本文の整理を行い、日本語史資料としての資料性に評価を下す。

## 2)ドミニコ会資料を用いた日本語音韻史研究

整理されたドミニコ会資料本文に基づき、日本語音韻史研究において未解決のまま残される諸事象について考究する。ドミニコ会資料は他のキリシタン資料以上に多様な用法で補助記号が使用される。他のキリシタン資料に用いられることのないアクセント記号などについて分析・考察を行うことで、新たな知見を見出す。また、他のキリシタン資料とは異なった形で現れるドミニコ会資料の独自表記は、直接的に当時の音価を反映するものと考え得る。その独自表記を対象とすることで、従来の研究で見過ごされてきた母音を始めとする日本語音韻体系の変遷を新たな観点から考察していく。

## 【結論・考察】(400字程度)

従来のドミニコ会文献群に関する研究において、多くの誤記が指摘されてきた。しかしドミニコ会文献群のデータ化し、自筆本との対照や、同一文献内における表記の比較を行うと、印刷・刊行の段階で生じたものが多く確認される。そういった誤記を除外すると、ドミニコ会文献群に表れる日本語は当時の日本語を直

接的に反映させた資料と考えることが可能となる。ドミニコ会文献群の中には、他のキリシタン資料と異なる表記も見られるが、資料の正当性があるとなれば、これは新たな観点からの記録と言え、日本語音韻史研究に新たな知見をもたらすものと成り得る。例えば、ドミニコ会文献群に見られる母音単独音節/o/に対する「o」のみの表記は、従来の研究では時期やその過程が不明とされてきた母音の音価の変遷が、近世初頭、特定の音環境において、先行する形で生じていたことを示す。このような新たな知見をもたらす可能性をドミニコ会文献群は秘めていると考えられる。